

韓国慶州の瞻星台

井 本 英 一*

死体を埋葬するに際して、その処理にいくつかの方法がある。そのままであったり、内臓を剔り出したり、草、獣皮、布で巻いたり、木棺に入れたりして埋葬する。土に穴を掘ると、土の容積が増える。土葬した死体や棺の分はいうまでもないが、その上に簡単な天井をつくり、その上に土を盛った場合は、かなりの量の土が排出されることになる。排出された土は、墓坑の上に土まんじゅうにつくるか、正方形あるいは長方形の切り餅形につくるか、ピラミッドの上半部を欠いた台形につくる。ときには、余分の土は搬出し、地面と同じ平面にする。このようにしてつくった土壇は祭壇として祭祀の対象になるが、時の経過と共に中心部が凹んでくる。土壇の上、あるいは地平面上に墓石を置く場合、石が傾くのが一般である。

まん中に凹みのある土壇は、祭壇として固定化した。より古い時代は、土壇は祭祀のあとは破壊して、あとに何も残らないようにしたものであるが、祭壇の観念が発達すると、土壇に代わって、上に凹みのある、地上に突出した岩が崇拜されるようになった。岩石の下には、死体は埋葬されなかったであろう。そこは聖地と見なされたので、周辺が埋葬地になる可能性がある。この形の石は、世界中に見られ、へそ石と呼ばれる。へそが人体の中心部にあるように、へそ石は世界の中心にあると考えられた。胎児のへその緒と胎盤と母体のへそは、へそ石にも類推を及ぼし、そこから人ばかりか、万物が誕生すると信じられた。へそ石は、古くは埋葬の場であったため、人が死にゆく所であり、人が生まれ出る所ともされた。

『日本書紀』にいう。倭迹迹^{ヤマトトヒメノミコト}姫命が箸で陰をつけて薨去したので、箸基と呼ぶ墓に埋葬した。

この墓に、昼は人が、夜は神が、二上山の北にある大坂山から石を運んだ（「崇神天皇」10年9月）。これは、土の前方後円墳の上に葺き石を張る姿を描いたものである。土壇を礫で覆うと、時と共に中央が凹んだ石の山となる。スピルバーグ監督の『シンドラーのリスト』の最終部で、大戦終了後、生き残ったユダヤ人や関係者が、シオン山にあるシンドラーの平たい墓石の上に、こぶし大の石を載せてゆく光景がある。現実にシンドラーの墓は礫で覆われている。墓石は、切り餅型の祭壇であるが、土壇が石壇に代わっても、石を葺く習慣は残った。

土壇—祭壇—へそ石と発展した石の塊りは、さまざまな形をとった。石の上に聖者あるいは巨人の足跡のある、仏足石系統のものがある。アッピア街道でペテロの面前に現れたイエスの足跡が、街道から入ったドミネ・クォ・ヴァーディス教会に安置された大理石上に見られる。ヘロドトスの『歴史』によると、スキュティア（現存のルーマニア、ハンガリー—帯の地域で、住民スキュタイ人はイラン系であった）では、ヘラクレスの足跡が岩に刻まれているのを見ることができた。この足跡は人間の足跡に似ているが、長さが90センチもある。この岩はテュラス川（ドニエストル川）の河畔にある（4.81）。イランでは、シーア派の初代のイマーム（教主）であるアリーの手形、足跡のほか、アリーの愛馬ドルドルの足跡が、聖地と俗界の境界に刻まれている。馬の足跡は、神あるいは聖者が乗る馬のそれで、神あるいは聖者を代表した。手形や足跡も、神や聖者を代表する。あるいは、岩石上の手形や足跡は、岩から生まれた神や聖者を表わしているのかも知れない。

中国の周の始祖后稷の母は、野に出て巨人の足跡を見つけ、それを踏むと心たのしくなって

*本学文学部

妊娠し、1年たって后稷を生んだ（『史記』周本紀第四）。足跡を踏むことは、神と交わることもあった。『史記』冒頭の三皇本紀にいう。庖犧ほうぎは燧人すいじんに代わって王となったが、その母を華胥かしよと叫んだ。彼女は、巨人の足跡を雷沢で踏んで、庖犧を生んだ、と。雷沢というのは、沢名で、舜が漁撈をした所である。落雷によって地面に凹みができ、周囲が土手になって、中に水が溜った所である。『古事記』にいう。昔、新羅にアメノヒホコという王子がいた。新羅に阿具沼という沼があったが、一人の下賤の女が沼のほとりて昼寝をしていると、太陽の光線が女の陰部を射した。女は妊娠して赤い玉を生んだ。それを見ていた下賤の男が女から赤玉をもらい受けた。アメノヒホコは男から赤玉をもらい、床のそばに置いておくと、美しい乙女に変身した（「応神天皇」）。

仏がその上に立った石、イエスが立った石、イスラム教の聖者が立った石は、別の見方をすれば、その石からこれらの神人が生まれて立ち上ったと考えられる。ローマに入ったイラン系の神ミトラ（ミスラ）を主神とするミトラス教では、ミトラスは、石から生まれる神とされた。ミトラスの祭儀は、洞穴の入口で、牡牛を屠る儀礼が主体をなしていた。ミトラ（ミスラ）の愛称は、古イラン語ではミスラカ、中イラン語ではミフラク～ミラクで、北伝仏教の中では、弥勒と音訳されてイランの神格として入っている。弥勒像は古くは石像で、大地の胎としての地藏の中に生きている。もう一つは、観音の中にその伝統が見られる。観音は、かならず、山の斜面に突出したへそ石の上に立つ。観音は、石から生まれる神の仏教版である。祭壇としてのへそ石は、死者が帰ってゆく大地の胎であるばかりでなく、死者や祖先が再生して出てくる祖先穴を具えた大地の胎でもあった。日本の墓の形式の一つに、三段積みの四角い墓石（それ自体が祭壇の堆積であるが）の前に、上に凹みのある祭壇を置く。この穴は、墓参のときに水を満たし、祖霊を元気づける祖先穴である。参拝にさいして、祖先は穴から出てきたのであろう。

玄奘は、ガンダーラ地方を旅したとき、白水北岸の大きな岩の上に、釈迦の足跡を見た。この足跡は、見る人の福德に応じて長くも短くも見える。後に、人々はこの石の上に石を積み上げて、部屋をつくった。遠近の人はみな出かけて、花や香を供養している（『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、1971年、102頁）。『西域記』より100年以上前の『宋雲行紀』では、この仏足石について、王城の北80里に、如来の足跡を印した石があり、塔を立ててその中に収めてある。石の上の足跡は、長くも短くも見える、とある（『法顕伝・宋雲行紀』長沢和俊訳注、平凡社、1971年、189頁）。『宋雲行紀』より100年以上前の『法顕伝（仏国記）』にもこの仏足跡について、その人の信心によって、あるいは長く、あるいは短く見えると述べている（前掲書、35頁）。この石は、現在も残っていて、高さ1m、幅0.87m、長さ1.3mある。私は、1959年故水野清一教授に連れられて、この地を訪れた。

韓国慶州市に新羅時代の瞻星台が遺っている。5.6mの平方の土台の上に立つ、ビンの上半部のような形の花崗岩の石積みの構築物で、新羅第27代の善徳女王（632-647）によってつくられたと『三国遺事』に示唆されている。高さ9.11m、下部径4.93m、上部径2.85mの寸法がある。5.6m四方の基壇の各辺は3枚の石で、合計12枚が使われ、全体で362～5枚の石が使用されている。12段目に約1m四角の入口が南向きにあいている。中には梯子をかけて入った。入口の高さは3段分あり、その上に、さらに12段の石積みがある。最上部には、四角い井桁状の二重の石枠がある。見方によっては、上方下円ともとれる。方形の入口は窓ではない。この高さ（4.16m）まで土石が詰まっていて、床の中央に鏡池と呼ぶ凹みがあり、祭日には水を満たして、星辰を映すといわれた。上半は内部は空間になっていて、入口から7段目、2mほど上に2本の石材が平行に走っている。さらに6段上にも2本の石材が走っている。井桁状の組み石の上に天体観測儀が置かれ、そこに上るために梯子をかけた梁であるという説は納得できない。

後藤邦夫教授のご教示によると、韓国の全相

運教授は次のようにいっている。瞻星台の天文台としての機能については、1973年12月の韓国科学史学会の共同討論会以後、学界の関心が高まり、金容雲、李竜範、南天祐教授らの論文が次々に発表された。しかし、討論会での見解の相異はますます深まり、今のところ共通した見解が現れそうにない（全相運『韓国科学技術史』高麗書林、1978年、51頁）。

瞻星台は、新羅の居城月城東半分の西北500mの場所にある。さらに、この軸線上1000mの所に統一新羅以前の多くの王の墳墓が立つ大陵苑（古墳公園）がある。月城の周辺部に石の氷室があるが、これも同じ軸線上にある。半月状をした月城のどこが、重点であったのか、知る由もないが、始原の地である鶏林（始林）は、月城の西半分の部分から西北200mのところにある。新羅は、金氏、朴氏、昔氏の三氏によって不定順位で治められたが、各氏の主たる居館の跡がはっきりしない。古い王である奈勿王（4世紀後半在位）の陵は鶏林の西200mの地に孤立する。月城東半分の東北1kmには皇龍寺址、さらに500m東北には、善徳女王の建てた(634)芬皇寺がある。

瞻星台に用いられた数の象徴は、暦と関係がある。基壇の四辺12枚の石は、四季と12月を指す。12段の石積みは、12月であり黄道12宮である。27段は、善徳女王の代数である。2段の井桁を入れた29段は、太陰月を指す。基壇の1段を加えると30段になる。太陰太陽暦が用いられていたことを示す。下半部は、凹みをもったへそ石である。伏鉢の上部を切断したような形は、ギリシアのへそ石に似る。

ギリシア語で、へそのことをオンパロスといい、へそ石もオンパロスという。19世紀に、フランス人考古隊によって、デルポイで発掘されたへそ石は、高さ50センチほどの砲弾の上部を切断し、上下に平面をつくり出した形状である。表面には神の衣といわれる格子状文様が浮き彫りされている。デルポイというのは、サンスクリットのガルバ（胎蔵）に対応する大地の胎（デルポス）の意で、地蔵（クンティ・ガルバ）の涎掛けとオンパロスの神の衣は同じものであ

る。布以前は獣皮を掛けた。

鏡池に水を張って星辰を映すことは困難である。合計4本の石梁が走っているからである。西北（乾）の方角は、冬に季節風が吹いてくる方角で、北半球の多くの文化では、古来、祖霊が去来する方角とされた。乾は八封のはじまりで、天・君主をあらわした。乾元は、全てのものの始まりであった。

古代ペルシア帝国の首都であったイランのペルセポリスから西北5kmのところ、ナクシェ・ロスタムという聖地がある。この地の岩山の摩崖に、ダリウス大王ら4人の帝王の巨大な墓が彫られてある。これらの墓の前に、高さ12m、各辺4mほどの、切り石積みの方形建造物があり、ゾロアスターのカアバと呼ばれている。北面の地上7mほどの所に四角い入口があり、王たちの墓に向いている。かつては、29段の石の階段がついていた。29は半端な数に見えるが、瞻星台にも用いられた数で、太陰月を表わしている。中に入ると、天井まで5mほどあり、扉を閉めると暗黒の空間になった。床面は、後世の遺跡荒しのために掘り起こされ、凹みは確認できない。外壁には、内部があたかも3階になっているかのように、飾り窓（めくら窓）がついている。およそ750年のち、ササン朝のシャープール1世が、この建造物の下部に銘文を残しているが、この建造物のことを始原の家と呼んでいる。

古代ペルシア王の遺体は、まっ暗なこの部屋に入れられ、皇太子が傍で王権を引き継いだらしい。『プルターク英雄伝』によると、皇太子は自分の上衣を脱ぎ、始祖のキュロス大王が着ていたマントを身につけ、ある種の液体を飲んだ（「アルタクセルクセス」3）。この建造物は、帝王の墓の前にあり、死者が帰る所であり、再生する所でもあった。それは始原の家であった。瞻星台は、内部の石梁に板を渡せば、3階構造になる。祖霊と共に月城を守ったのであろう。イラン神話では、始原の王イマは、冬の到来にそなえて、四角い城塞ワラをつくり、その中に、人間とあらゆる動植物の種子を入れた（『アヴェスタ』「ウィーデーウ・ダート」第2章、岡

田明憲『ゾロアスター教の悪魔除い』平河出版社、1984年、132-146頁)。イマ王は、インドの終末の王ヤマ（仏教の閻魔にあたる）で、イランでは始原の王になっている。イマ王がつくったワラは、始原の家であった。イマ王のワラの背景には、冬の到来と共に、多くの人間、動植物が死滅し、選ばれたものたちの種子のみがその中に入り、再生するという神話がある。

同じ建造物が、近くのキュロス大王の宮殿の西北隅にある。こちらは、崩壊寸前のため、補強されている。ソロモンの牢獄と一般に呼ばれているが、建設当時は、宮殿の西北の守りとされる建物だった。日本では、乾の蔵（倉）と巽の井戸といわれるように、屋敷上のこの軸線は、神聖視された、床を高くして湿気を避ける日本の倉は、物をしまふ場所になったが、分厚いしっくい製の窓と扉を閉めると、中は2階（3階）づくりの暗黒の部屋になり、火事や地震にも強い。東大寺の金堂（大仏殿）の西北に位置する正倉院は、北倉と南倉が本来のもので、中倉はのちに、中間に付加したものである。倉や始原の家は、古くは二つで一体をなしたようである。大嘗宮、伊勢神宮、賀茂社に2社殿があることと関係があるが、始原の家も、もとは2つあったらしい。それらは死と再生を象徴していた。

イマ王のつくったワラでは、1年に1度だけ、星辰や日月が昇りかつ沈むのを見ることができた。ここでは、1年が1日のように思えた。40年ごとに、2人の男女から一組の男女が生まれた。畜類の間でも、それは同じであった。扉は、自ら内部に向かって光り輝いた（岡田、前掲書、144-145頁）。ここでいおうとするのは、ワラは、臨時の祭り以外では、年に1度開くことになっていたということであろう。前夜から始まる宵祭りでは、星辰の位置を占ったのであろう。ワラは天文台ではないが、年に1度はそう考えられてもよかった。40年ごとに、人間や畜類が生まれ変わったというが、40年は40日でもあった。仏教の中陰（中有）は49日で、死者は仏になる。キリスト教では、四旬節は、灰の水曜日から、途中の日曜を除いた7週目の日曜までの40日間

のことで、この日曜が復活祭である。四旬節は途中の日曜を入れると47日になり、仏教の中陰の日数と近い。イスラム教では、死後40日を経て再生するので、『アヴェスタ』の伝承に近い。ゾロアスターのカアバ、あるいはイマ王のワラは、始原の家で、死と再生に関わる場所であった。

イマ王のワラは、ノアの方舟を想起させる。神は、世が乱れたので、人類を滅ぼそうと思った。神は、正義の人ノアだけは助けようと考え、糸杉の木で方舟をつくらせ、その中にノア夫婦と、彼らの子セム、ハム、ヤベテと彼らの妻を乗せ、あらゆる鳥獣のつがいを入れた。神は7日あと、40日と40夜の間、雨を降らせた。この間に、地上のあらゆるものが死に絶えた。ノアが600歳になった2月17日に大雨が降り出し、601歳の2月27日に、大洪水の水は、すっかり地から退き、大地は全くかわいた。方舟は、3階建てになっていて、屋根があり、入口は横に設けてあった。屋根には上げ蓋式の窓がついていた。ノアは、この窓を開けて、カラスやハトを飛ばし、水が退いたかどうかを調べた（『旧約聖書』「創世記」第6-第7章）。

ノアの方舟と洪水の神話が、2月17日と2月27日という数を用いていることは、注目してよい。古代ユダヤ暦は太陰暦であったので、2月17日に始まり、翌年の2月27日に終わったというのは、太陽暦の1年を表わしていたことになる。10月1日に、山々の頂が現われた（8.5）とか、1月1日に、大地がかわき始めた（8.15）という記述がある。これは、自然というよりは、人為的な日付である。過越節から1か月経った2月中旬から、1年にわたって、7月17日（7.24、8.3-4）、10月1日、1月1日を祝ったほか、3月27日（7.12、）、11月11日（8.6-7）、同18日（8.8-9）、同25日（8.10-11）、12月2日（8.12）に行事をもったのであろう。ノアの方舟も、イランのゾロアスターのカアバや韓国の瞻星台と同じように、天文・暦法とつながっていた。ノアは、方舟の天板の窓をあけて、カラスとハトを放って洪水が退いたかどうかを調べた。ギリシアのヘソ石オンパロスの先端に

は、2羽の鳥が止まっているという神話がある。世界の東西の端から、鳥が飛び立ち、出逢ったのがデルポイのへそ石の上であったという。ノアの方舟の話で、40日の大雨のモチーフがあるが、死と再生の中間の期間を表わしたものである。

ノアの方舟、ゾロアスターのカアバ、ソロモンの牢獄は、いずれも直方体で、四角柱形のへそ石である。オンパロスや瞻星台のような、円錐形、円柱形のへそ石は、イランやインドのボンベイにいるゾロアスター教徒が、死体処理に使う沈黙の塔に見られる。沈黙の塔というのは、英国人によって名づけられた、タワー・オブ・サイレンスのことであるが、イラン人はダフマと呼んでいる。沈黙の塔は、山頂あるいは山の中腹の平坦部につくられた直径10mあまり、高さ4mほどの壁で囲まれた建造物である。壁は石と土で固められ、床面は地上2mほどの高さにある。四角い入口があり、外から階段を上って、内部の床に入る。床のまん中には、径2m近くの丸い穴が掘ってある。床上には、3つの同心円が描かれ、円は24の部分に区切られ、外の円には男、中の円には女、内の円には子供の遺体を置いて鳥に食わせる。そこで合計72の遺体が同時に安置できることになる。遺体は衣服を脱がし、2人の男が死体を解体し、鳥が食べ易いようにする。衣服は、一か所に積んである。白骨は、まん中の穴の中に投入する。インドの場合は、雨が降るので、穴の下に炭や砂利が敷いてあり、水は濾過されて外に流れ出る。

沈黙の塔は、高さ2m足らずの巨大な円形のへそで、まん中に穴（凹み）がある。このへそ石には、死者が帰ってゆくが、骨が穴に投入されて、あの世で再生する仕組みになっていた。ノアの方舟やカアバには屋根がついていたので、入口の扉を閉めると、内部は暗黒の空間になった。沈黙の塔はこれに反して、屋根をつけない。この点で、瞻星台と同じである。沈黙の塔は、夜は満天の星辰と死者は、直接交流するが、天文暦法とは関係がない。3階建ての構造は、平面的な3層の同心円になる。強いていえば、瞻星台の背後には、多くの王墓があること

である。これら2つの建造物の間には、多くの共通点と相異点がある。屋根をもたない点は注目すべきであろう。四角は大地を象徴し、円は天を象徴したと考えられる。さらに遡れば、方墳と円墳にまでたどりつく。

沈黙の塔は、まず壁をめぐる。そのあとで、適当な高さの床を築き、四角い入口を開ける。床の下は、必ずしも、土石で密に詰まっているわけでもない。荒らされた沈黙の塔の内部に入ると、床下が蜂の巣のようになっていて、死体に供えたと思われる陶製の燭台の破片などが散乱している。14世紀のモロッコの大旅行家イブン・バツータが、アラビアの聖都メッカを訪問したときの記録に、カアバ神殿のあるモスクの地下には、蜂の巣のような迷路が走っているとある（『三大陸周遊記』前嶋信次訳、角川文庫、1961年、53頁）。メッカのカアバ神殿は、イスラム教の聖所であるが、異教時代から崇拝されたへそ石であった。ヘロドトスによると、ゾロアスター教の祭祀階級であるマゴスたちは、自分たちの死体を鳥や犬に食いちぎらせるが、一般のペルシア人は、死体に蠟を塗って、土中に埋葬するという（『歴史』1.140）。初めに、へそ石の発生について述べたが、一般民衆は、鳥葬しなかったようである。沈黙の塔の床下が、あちこち空洞になっているのは、太古には土葬をしていた名残りである。

アラビアのメッカにあるカアバ神殿は、『コーラン』では始原の家と呼ばれ（3.96）、イスラム教徒であれば、一生に1度は参詣しなければならない聖所である。カアバ神殿は、現在のものは、高さ15mほどで、地上2m余りの所に床面がある。底辺は12m×10mある。北東の壁面の左側に入口があり、トラップを寄せて出入りする。入口の近く、地上1.5mの所に黒石（隕石）がはめ込んである。床の中央部に穴があり、フバルという神像が安置してあったが、マホメットによって破壊された。ハトの木像もあったが、破壊された。カアバには屋根があり、床上に立った3本の柱で支えられている。屋根には、上げ蓋がついている所まで、床から梯子が立てかけてあり、屋上に出ることができる。

異教時代には、アラブの360の部族を象徴する偶像が、カアバの周囲に安置してあった。これらの偶像は、新年ごとにそれぞれの部族によって取り替えられたが、マホメットによって、全て粉碎された。

メッカのカアバ神殿は、マホメットの子孫で、聖都メッカの支配者の大シャリーフの宮殿の西北1.5kmの所にある（『メッカ・メディナ』世界の聖域5、講談社、1979年、116頁）。異教時代は、この宮殿は、異教の首長の宮殿であったことは推測するに難くない。カアバの周辺は、現在は整備されて、聖モスクの境内になっているが、古くは、イスラム教の預言者や聖者の墓によって囲繞されていた。南西の壁の前には、高さ90cmほどの半円形の壁で囲われたアラブの始祖であるイスマイルとその母ハガルの墓が付いている。カアバの存在する地点は、涸れ川の川床上にあたり、モスクの境内のうちでは、もっとも低い。したがって、きわめて稀なことであるが、集中豪雨があって洪水が生じた場合、カアバは、大洪水の中のノアの方舟のように、水面に浮くことになる。多くの欧州人、日本人のメッカ巡礼者が伝える所では、このとき、多くの死体が流れ寄るといふ。壁面にはめ込まれた黒石は、母胎から出てくる新生児の頭部にたとえられる。カアバ神殿は、死にゆく所であり、生まれ出る所でもあった。屋根を支える3本の柱は、へその緒と呼ばれる。へその緒の中を走る2本の動脈と1本の静脈を表わす。メッカのカアバは、3階建てになっていないが、3という数表象が柱の数で示される。祭りの日には、12mほどある梯子を上って、上げ蓋をあげて屋上に出た。入口の梯子と同じように、梯子は、天と地をつなぐ象徴で、神霊の降下を象徴する。壁面の入口は、かつては右側にもあった。2つの入口は、生と死の入口と出口であった時代があったことが推測できる。

メッカのカアバも天文、暦法と関係があると考えられてきた。異教時代、カアバの周囲に安置された360の偶像の数は、1年を表わしている。カアバは、イスラム以前から、神の座と考えられてきた。その周りを7回巡る儀礼は、天

空の中心を巡る7つの惑星と関係づけられた。10世紀のアラブの地誌家、アル・マスウーディーによると、カアバは、日月と5つの惑星に捧げられた神殿であるという（『黄金の牧場と宝石の山』4.47）。カアバ内の3本柱は、天と地をつなぐ血管で、梯子も天地を結ぶものであった。屋根の上げ蓋も同じ意味をもっていた。瞻星台の頂上にある井桁の一つは、天の井戸つまり天井を表わしており、下側の井桁は、地の井戸を表わす。カアバの横には、ザムザム井があって、扱めども尽きない生命の水を湧出する。瞻星台では、井泉は、床上の鏡池になっている。へそ石は、地上の井戸であり、天の井戸の底でもあった。

現在、北京城前門外の南郊に天壇、安定門外の北郊に地壇が良好な状態で遺っている。現在の天壇も地壇も、明末に建築され、清に受け継がれ、多少の改変が加えられたが、根本的には変わっていない。中国では、前漢以来、天壇は帝都の東南にあり、地壇は北東にあった。それぞれ、南郊、北郊と称した。天壇は、現在は、3段の円丘の上に、3階建ての祈年殿が建ったものと、その南の3段の円丘だけのものから成る。地壇は、現在は、2段の方丘である。歴史的に見ると、天壇の段数は異なる。梁・陳では2段、隋・唐・宋では4段、元・明・清では3段であった。時代によっては、皇帝は、天壇で、本来祭るべき天と一緒に、地をも祭った。方丘も円丘も、巨大なへそ石であり、祭壇であった。南北に別々に設けられたが、天壇が主とされた。

新羅の瞻星台は、内部的には3階になっている。基壇の方壇は1段である。同時代の唐代の天壇は4段であるので、唐文化の直接の影響であるかどうか、疑わしい。壁の中にへそ石をつつむ仕方は、西アジアのやり方に近い。天壇の祈年壇は、現在のものは入口の数は、扉の数12だけある。梯子の象徴もない。天を祭るといっても、屋根に上げ蓋が付いているわけではない。へその中央に凹みはない。天文、暦法に関する表象も伝承もない。天壇は、帝都の東南にある。カアバや瞻星台は西北にある。乾と巽の軸線上にあるので、全く別のものではないが、瞻星台

は、唐文化のものとは別の文化の影響を受けている。北京の場合、明の十三陵は、市の西北40 kmの所にある。この点でも、瞻星台と古墳公園あるいは鷄林（始林）と奈勿王陵の複合体と王城との位置関係とは、異なる所がある。北京の西北には、西太后によってつくられた人工湖昆明湖のある頤和園がある。ここの万寿山には、南郊の天壇の祈年殿そっくりのものが西太后によって建てられ、湖面から仰ぎ見ることができる。西太后の意図が那邊にあったのか、明らかにしえないが、西北の方角は、八卦の始まる始原の方角であるので、西太后以前から、頤和園の原型はあったと考えてよさそうである。

天武天皇15年（686、のちに改元する）1月2日、天皇は諸王卿に宴を賜わった。天皇は、諸王卿に謎を出し、それを解いた者に褒美を与えた。16日にも、大安殿で諸王卿を召して宴を賜い、謎を出し、それを解いた者には、さらに褒美を与えた。17日には皇后宮で宴があり、18日に朝廷で大宴会があった。この日、天皇は御窟殿の前に出御し、芸能者らに祿を賜わった。7月20日、改元して朱鳥元年とした。28日、修行者70人を出家させ、宮中の御窟院に齋会を設けた（『日本書紀』）。

御窟殿も御窟院も同じものであろう。ともに京内ではなく宮内にあった。窟というのは、入口はあるが、窓がなく、扉を閉めると暗黒を現出する空間である。このような建造物は、石あるいは土でできているが、殿や院の字を当てているので、天皇の祭祀に堪えるものであったに違いない。1月18日は、小正月の終わりの日で、正月の再生儀礼を行った芸能者に褒美を与えたのである。7月に、天皇の体調が不例であったので、改元して、始原から始めようとしたのであろう（9月に崩御）。御窟殿（院）は、始原の家であった。始原の家は、今まで見てきたものは、イランのパスルガダイのキュロス宮殿の西北隅にあるカアバ、ソロモンの牢獄を除いては、全て内城の外にあった。しかし、天武天皇の始原の家は宮中にあった。新羅との交流があったので、瞻星台のことは伝わっていたであろう。天武4年（675）1月2日、始めて占星台

を建造した。この占星台が、どのようなものであったのか、全く分かっていない。奈良県橿原市見瀬町の益田の岩船は、上部に2つの四角い穴をもつカアバ（高さ4.7m×長さ11m×幅8m）であるが、全天空的な位置にない。新羅の瞻星台との関係も明らかでない。御窟殿（院）との関係となると、なおさらである。

齊明天皇3年（657）秋7月3日、靺鞨國の男2人、女4人が筑紫に漂着した。彼らは墮羅人といった。朝廷では、馭馬で飛鳥に召し、15日に孟蘭盆会を設け、その夜、トクワラ人に供応した。6年7月16日、トクワラ人乾豆波斯達阿は、本国に帰りたいが、のち日本に帰って参ります。妻を人質に置いてゆきますといて、数十人と共に、西海の路に入っていた（『日本書紀』）。トクワラは、アフガニスタンからウズベキスタンにかけての地域を指し、乾豆はヘンドックつまり印度のことであり、波斯はバルシクつまりペルシア人のことである。達阿はダリアつまり、人名ダーラーを写したもので、ダリウスの中期ペルシア語形である。乾豆波斯つまり東イラン（アフガニスタンあたり）のダーラーの一行（墮羅人）が、ササン朝ペルシア滅亡（642）後、長安経由で日本に漂着した可能性がある。天武天皇4年には、日本に残ったダーラーの妻や中央アジアのサーウェ（舎衛）の女の記事がある。飛鳥の宮廷に、西アジアの文物の情報が伝えられたであろう。

日本では、始原の家が宮中にあったが、石灰壇もそうである。平安宮内裏の仁寿殿や清涼殿の東南隅にある石灰壇は、地上から宮殿の床まで、土を石灰で固めて築き上げてある。清涼殿では、東庇南端の2間×1間で、東側は御簾や蔀をつり、南側は壁で西側母屋との境には御簾をつり、北側は入口とし、開放されていた。これで、いちおう密閉された空間をつくり出していた。壇の南側に、直径、深さとも2尺ほどの穴があり、『年中行事秘抄』では地炉と呼んでいる。冬と春には火をおこして料理したので、灰が残っている。天皇は毎朝、沐浴のあと更衣してから、円座を敷き、伊勢神宮と内侍所を遙拝した。

北京の天壇は、故宮内にはなく、外城の前門の外、東南の位置にある。石灰壇は、東南という点では、天壇と同じであるが、他の点では、西アジアのカアバに近い。丸い瞻星台とは、形ばかりでなく、位置も違う。石灰壇は始祖が宿る祭壇ではなくなってしまった。天皇がそこから始祖を遙拝する壇になってしまった。床上の穴は、水を満たすのではなく、火を燃やした。イランの古代遺蹟の中には、四角いへそ石に丸と四角の穴が彫り込んであるものを拜火壇と呼ぶものがあるので、石灰壇の火炉には、古い伝統があるようである。火炉は塵壺ともいい、塵を払き入れる所ともいうが、西アジアでは、へそ石の穴に人骨を投入したり、祭儀終了後、一時的に祭具を穴の中に破棄したと考えられるので、これにも古い伝統がある。石灰壇は、天皇が素足でその上に立つことはできなかつた。必ず、円座を敷いた。石灰で固めた床は地面と同じで、天皇はその上に直接接触することはできなかつた。清涼殿の西北は、御湯殿であった。天子が湯殿で洗い粉を使うとき、その容器を床に投げるのを合図に、蔵人が弓弦を鳴らした。天皇がもっとも無防備な状態になったときの魔除けの呪術である。半開の簀の子を隔てて、東側に御湯殿の上があり、その南に御手水の間がある。西北は始原の方角であったので、湯殿や便所があった。天皇に仕える女子たちは、始原の状態にあるので、西北の部屋に侍った。

日本の盆踊りで組み立てる櫓は、カアバの伝統を受け継いでいる。床が地上2mくらいの所につくられ、梯子で上がるが、床下には何もない。四隅の柱には竹が立てられ、祖霊が来訪するようにしてある。櫓の周りを、時計の針とは逆方向に廻り、音頭に合わせて、向きを変える。櫓は祭壇で、祖霊は群行して来訪した。盆踊りの場所は、古来、河原であった。河原は境界で、カアバやノアの方舟の立地でもあった。北京の北郊の地壇の周辺は、幅8尺、深さ8尺の方沢が巡っている。日本では、兵庫県高砂市にある石の宝殿は、背面に、ピラミッドの上から4分の1の四角錐を切断した脚立型をつけたカアバである。横倒しになった状態であることは明らかである。

しかし、これを横倒しのまま、あるいは立てて、下に流れる（現在は）水量の少ない川に運び、海に出すことは不可能に近い。石の宝殿の四周には、幅1m、深さ1.5mほどの溝（方沢）が巡っている。丁寧に仕上げられているので、本体を倒して移動することは考えられない。本体と溝の美しい仕上げが、台なしになるからである。カアバには、生と死を象徴する2種類があったらしいことは述べたとおりである。

仏像には生きた釈迦を表わす釈迦立像と、釈迦の涅槃を表わす寝仏の涅槃像がある。北伝仏教では立像が、南伝仏教では涅槃像が信仰の対象になる。生の象徴と死の象徴は同じように信仰される。イランでは、キュロスの宮殿とダリウスの宮殿の西北に、それぞれ1つのカアバがある。この2つは別々のものであったのか、一体であったのか知る由もない。仮りに生と死を象徴するものとしても、それぞれが信仰の対象となった。

瞻星台を比較文化の対象として見るとき、古代西南アジアの始原の家と多くの共通点をもっていることが分かる。文化交流の結果であることは否定できないが、その経路や瞻星台以前の文物についての研究は、更に進める必要がある。なお、16世紀前半に出版された李氏朝鮮の地誌『新增東国輿地勝覧』（ソウル、1978）には、どの都市の祠廟の項にも、社稷は西に、厲壇は北にあることが明記されている。慶州も同じであるが、瞻星台は東南30里にあると記されている（356頁）。厲壇は共同墓地の祭壇のことであろう。カアバは厲壇の特性ももっているので、瞻星台は厲壇と並行して新たにつくられた祭壇であったと考えられる。

付記 1981年と1982年、私は韓国観行公社の招待で、韓国研修旅行に参加させて頂いた。旅行に参加できたのは、徐龍達教授の推薦のお陰であった。研修旅行では、金清子氏の周到な案内を受け、それ以後の私の研究の糧となった。この小論が書けたのも、お二方との出逢いのたまものである。この場を借りて、感謝を捧げる。

井本英一氏の報告をめぐる討議

井本報告「韓国慶州の^{せんせいだい}瞻星台」は論争を提起するものである。その論点とは、「瞻星台」が韓国の人びとが昔からの言い伝えとして信じてきた天文台であるのか、否かである。井本氏は、「実際の天文台ではない」ことの論証を試みたのである。

論文に入る“まえおき”として、井本氏は全相運『韓国科学技術史』の中でもこの問題が取り上げられていることを紹介した。韓国では、^{こんてんぎ}瞻星台の上に渾天儀（天体観測機器）か何かをのせて星を見たのであろうと議論されている。しかし、現場を実見した研究者たちは皆、どんな観測がなされたか、実際観測できたのか不明であるという。

井本論文はまず、古代世界の《へそ石》から立証をはじめめる。死体を埋葬した土壇は次第に祭壇として固定し、やがて上に凹みのある《へそ石》が崇拜されるようになってゆく。ヘロドトス『歴史』、司馬遷『史記』、玄奘『大唐西域記』、『法顕伝・宋雲行紀』、『法顕伝（仏国記）』などの文献を引用して、《へそ石》は死者が帰ってゆく大地の胎であると同時に、死者や祖先が再生して出てくる祖先穴を具えた大地の胎でもあったという。

つづいて井本氏は瞻星台の形状を述べ、その床の中央に鏡池と呼ぶ凹みがあり、祭日には水を満たして星辰を映すといわれたことに言及する。氏の主張は、この凹みを《へそ石》と考えてはどうか、というものである。これが第一の論拠である。

また、石組みの石の「数」は太陰太陽暦と深く関係し、重要な意味を象徴しているという。そして象徴するものはさらに、宮城と墳墓の軸線と方向にもある。宮城の西北、^{いぬい}乾の「方角」は八卦のはじまり、全てのものの始まりであった。瞻星台は新羅の居城月城の西北 500メートルにあり、祖霊と共に月城を守ったのではない。これらが第二と第三の論拠である。

古代ペルシアの事例（ゾロアスター教の聖典『アヴェスタ』、イラン神話、キュロス大王の宮殿）や古代日本の神道・仏教の例に加え、旧訳聖書の「ノア方舟」の洪水と日数の意味と象徴も、氏の論拠を補強している。そしてノアの方舟、ゾロアスター教のカアバ、ソロモンの牢獄、瞻星台はみな、同じように天文・暦法とつながっており、直方体で四角柱形の《へそ石》なのである。

イスラム教の聖都メッカのカアバも『コーラン』では始原の家と呼ばれ、メッカを治めるマホメットの子孫（大シャリーフ）の宮城の西北にある。酒れ川床に建つため、稀な集中豪雨時には「方舟」のようになるという。天文・暦法と関係があり、さまざまな「数」や建築様式が象徴しているところは瞻星台と符号している。

こうして井本氏の論証は最後に、中国と日本の始原の家と基壇との類比にすすむ。新羅の瞻星台は、内部的には三階で基壇の方壇は一段だから、唐代天壇が四段であることをみると唐文化の直接の影響であるかどうか疑わしい。明の十三陵は北京市の西北（40km）にあるし、清の西太后による頤和園（その原型）も西北に位置している。

『日本書紀』にみえる天武天皇の「みむろのまち（御窟院〔殿〕）」は始原の家であるが、城外ではなく宮中にある。新羅との交流から瞻星台のことは伝わっていたと思われるが、天武四（675）年に占星台を建造したという記述があるのみである。占星台がどのようなものであるのか全く不明であり、瞻星台との関係も明かでない。面白かったのは、日本の盆踊りで組み立てる櫓がカアバの伝統を受け継いだもので、櫓は祭壇で祖霊は竹を依代として音頭に合わせて群行して来訪した、という条であった。

井本氏は、瞻星台が古代西南アジアの始原の家と多くの共通点をもつことを論証された。また《へそ石》ことカアバは、^{れいだん}厲壇の特性をもつことから、瞻星台は厲壇と並行して新たに

つくられた祭壇であって、祖霊を守護したものであったのではないかと考えられる、と氏は報告を“まとめ”られた。

以上が報告の概略である。井本氏の古代西南アジアに関する該博な知見に基づく論証に対し、つぎの3人からコメントがなされた。

後藤邦夫氏は、韓国では現在もなお、瞻星台は天文台であるとされている。また、中山茂氏（神奈川大学教授・科学技術史）の見解も、実証はできないが天文台か、あるいは占星術に関係した建造物であろう、であったということを紹介された。

山川偉也氏は、オンパロス（ギリシア、ペルシア、イランの《へそ石》）について疑義があると二点を指摘された。第一に、ギリシアのオンパロスは約40～50cmほどの小さなものしか（山川氏は）見たことがない。そして幾つかのギリシア都市の祭壇には凹みが認められないことから、オンパロスと祭壇の結びつきは「不明」ではないだろうか。

そして第二に、オンパロスは世界の中心部に位置し、東西の端から等距離に所在するという神話・伝説のあることは承知している。しかし、そのこと（へそ石＝中心：どこの、何の中心か）はまだ証明されていないことである、と。

鄭建永氏は、幼少時から天文台と聞いてきたが、疑問に思っておられたという。井本論文にもあるとおりの暦法の数字が重要であり、その「象徴的意味」から宇宙観測の施設であったのではないか、何か天文学的機能をもつ施設であったのではないか、と鄭氏自身の見解をコメントされた。

瞻星台が宇宙と関係していたことは確かである。そして祖先・霊・王は宇宙と連動している。祖霊や王には象徴が凝縮している、だからこそ

瞻星台は「実際の天文台ではない」というのが井本氏の締めくくりの再主張であった。

〔司会後記〕

井本報告は、世界史の見方にも影響を及ぼすロマンを含んでいる。ちょうど報告日より少し前に、エジプトのアレキサンドリア沖でクレオパトラの宮殿が発見され、また中国で稲を基盤とする文明遺跡が発掘されたことともつながっているように私は思えた。

国際日本文化研究センターと中国四川省文物局などからなる「日中共同長江文明学術調査団」は10月27日、長江上流の竜馬古城遺跡（四川省）で、約4500年前頃とみられる基壇遺跡を発見したと発表した。

政治と祭祀をつかさどる王がいる、黄河やエジプト、メソポタミア、インドと並ぶ「第五文明」の存在していた可能性が強まった。

基壇は方形に土を盛り上げた建築物の基礎部分で、見つかったのは上に神殿を築いた中国最古の祭壇とみられる。城壁跡のほぼ中心に、土で三段に築かれた南北60m、東西40m、高さ約6mのもので、大掛かりな造成工事をうかがわせる。基壇北側から人骨が見つかった。（朝日新聞1996.10.28記事大略）

来年から始まる本格的発掘調査に期待が膨らんでくる。これは瞻星台と関係あるのではないか。

報告と討議をこの記事にまで拡大し関連づけるには、時間と参加者が少なすぎたことが残念であった。文化人類学や民俗学、科学技術史や社会史など多くの隣接する分野にまたがる学際的（インターディシプリナリィ）なテーマを論争提起的・意欲的に展開された井本氏と参加者、総研職員の方々に感謝申し上げ、文責とする。

（種田明*）